

鴻 koh

月刊俳句誌

令和元年5月1日発行
(毎月1日1日発行)
第14巻第5号 通巻155号

5 月号

2019



鷹鴉と化す日を上総国分寺

はこべ野は母置いて来し処なり

水草生ふあたりに二体道祖神

囀りのまつただなかにゐて淋し

雁供養浜の暮色を奪うては

奥羽街道虫出しの雷続けざま

山頭火句碑に夕べの春の雨

札幌河岸雀隠れに日の溜る

草加煎餅かりかり春のたけなはに

蘂ざくら墨東に潮満ちてくる

黙阿弥の碑に花の散る花の舞ふ

墨磨つて木の芽起しの雨となる

臍に疲れの溜る花の夕

木の芽起し

主宰作品

増成栗人

荒川心星



黄水仙

括られし枯菊なれどよく匂ふ
ふくら雀林泉の日を存分に
身綺麗な松の一樹ようららなり
梅二月蹲踞にある水の黙
鳥語降る障子の目貼り剥がすとき
母許の日なり笹子の鳴く日なり
若芝にクルスの影の伸びてくる
蝶来たれ来たれ寺領の黄水仙

こんもりと藪うぐひすの舌足らず
あたたかや耳立ててゐる石の亀
来し方を俯瞰してゐる椿山
一日を風に疲るる草の餅
青鰻に名前入りたる箸おろす
お涅槃の玻璃に輝く落暉かな
淡湖の細江や蘆の角組める
テーブルに明日出す封書木の芽雨

こんもりと



半谷洋子

谷口摩耶

牡丹の芽

寺町のどこもかしこも雛祭
 白梅の枝の先まで咲き満ちて
 荒行の寺に育ちぬ牡丹の芽
 由緒ある雛飾られし佛間かな
 参道に飼はれし猫とクロッカス
 満天星の芽立ちの丈のまちまちに
 水温む子らの少なき町となり
 さくら草咲けり信号機の真下

令和元年度「鴻」結社賞・新同人発表

結社賞授賞

- 第十三回「鴻」賞 (仙台)
佐野久乃
- 第十三回「鴻」新人賞 (横須賀)
鈴木 崇
- 第十三回「鴻」新人賞 (我孫子)
相川 健
- 第四回「鴻」底紅賞 (北見)
和田 遊
- 第四回「鴻」底紅賞 (伊勢崎)
倉林はるこ

新同人発表

- 新蒼韻集同人 (仙台)
佐野久乃
- 新底紅集同人 (山形)
伊藤啓泉
- 新山彦集同人 (喜多方)
田部富仁子
- 鈴木 崇 (横須賀)
- 相川 健 (我孫子)
- 水谷はや子 (豊川)
- 大沼経子 (土浦)
- 鈴木隆一郎 (会津)

令和元年度の結社賞及び新同人は以上のように決定いたしました。

「鴻」主宰 増成栗人

蒼韻集

青き踏む

赤峰ひろし

流水に白のかがよふ根深かな
凍鳥の鋭き声発し翔ちにけり
一碧の天一輪の冬牡丹
ものの芽のほぐれてきたり伎芸天
寒鯉の身じろぎもせず髭伸ばす
絶つほどの煩惱はなし野水仙
頑固なる一病なるも青き踏む

鸞替

横井 遥

観覧車水仙の地へ降りて来る
青き目の托鉢僧や山に雪
鸞替の太鼓だんだん早くなる
鸞替の一期一会の輪を解く
寒明けの城の空堀水の堀
紅白の達磨のみくじ春立てり
持ち帰る大吉みくじ日脚伸ぶ

埒なき夢

石田蓉子

冬の霧どこかでパンを焼いてをり
白梅の蕾にひそと雨の粒
大寒の日向日向に鳥の声
短日の焦げ目ほどよき一夜干
風花や誰にも会はぬ一日なり
葱坊主埒なき夢に疲れしよ
青鸞は群れぬ鳥なり水温む

水たまり

森 睡花

首にふるる耳輪つめたき二月かな
二ヶ月の鳥の来てゐる水たまり
山頂の一灯とほく冴返る
二の午の中空にある昼の月
梅咲いて門扉を固く閉ざしたる
探梅の男が空を誉めにけり
おぼぶりの湯呑みいくぶん春寒く

溶けさうな

中村世都

カンツォーネ冬満月の港町
冬たんぽぽぽとポンペイ遺跡かな
くるぐると烏賊墨パスタ冬終る
春の雪大鯉の朱の溶けさうな
春めくと言へど時の鳥の声
石畳行く街の音春の音
海光を弾く流木多喜二の忌

竹百幹

小澤 冗

寒暁の浜に野太き蟹のこゑ
禅寺の竹百幹にある寒さ
竿いつばい冬日に晒すシートかな
立春大吉舟屋にひびく鑿の音
国引きの湖の蜷の艶やかに
祖の墓に隣る段畑耕せり
菩提寺の花の芽固き風生忌

融雪劑

岩佐 梢

春未だ風のかたちの御神木
川風の吹き上げてくる探梅行
水槽の中に冬眠蛙とは
立春の厨に麩麩を焼く匂ひ
魚は氷に翳せば発光する切手
融雪劑の撒かれ建国記念の日
二ヶ月の藁灰を取る煙かな

絹の布

田辺満穂

ぬめぬめと鯉の口中寒明くる
鳥帰る幅三尺の露地の空
貝張に裁つ絹の布春立てり
かばかりの白魚汲むに小半日
今し方汲みし白魚飴炊きに
豆打ちの方一間の櫓かな
豆打ちの支度の宮の外竈

近つ飛鳥

森多 歩

枸橘の芽よやはらかき雨の音
鸞替へて淀の大橋渡りけり
近つ飛鳥蓬生の空ふかぶかと
落椿また一つ風生まれ来る
暮るるには間のあり蝶に空のあり
ぼたん雪乗せ雪国へ汽車の発つ
白樺の芽吹きうながす風が寄る

啄木の碑

西野桂子

砂町の波郷のベレーかげろへり
俳人の遺愛のカメラ春よ来よ
枯蓮を浚へる筏あたたかし
立春の鶴がさかんに潜りけり
三寒四温啄木の碑がアメ横に
建国の日の皮ジャンの匂ふ路地
朝よりの生活の水も春の水

海明け

飯川久子

吹雪かれて吹雪かれて心素となりぬ
平成を見納めとなる雛飾る
断水の水ほとばしる寒の明け
海明けや平方根の解かれをり
平成の風をまとひし雛納む
白樺の幹の林立春兆す
骨密度ほめられてをり山笑ふ

臘涙のあと

佐久間敏高

踏絵踏むごと薄氷を踏みにけり
露のたうやはらかき風生まれけり
食卓に臘涙のあと日脚伸び
菜の花忌深海に棚あるといふ
風二月常陸の海は日を弾く
花辛夷うすうすと山連なりぬ
健気とは雪割草の淡き紅

空色に

森川淑子

春を待つ付箋の色を空色に
子の靴のすこし大きめ桃の花
悲なき日よほろ苦き露の薑
月おぼろ読み疲れたる目を閉ぢて
木の芽風旅の予定を立てやうか
夜更けには雨となりさう沈丁花
末黒野へ風来て風の滞る

オムライス

槇尾麻衣

下萌のふくふく鳶の笛しきり
青空にドローンの響き建国日
乗り越してひと駅戻る四温晴
法螺貝に始まる春の例大祭
春光や丹色のきはむ資料館
あたたかや仕上げほどほどオムライス
風船のほろ酔ひの手に誕生日

鴻 作品抄

梅三分近つ飛鳥の土師の里

林未生

幕間のやうに二月の過ぎにけり

足立枝里

春の雪動かぬものを包みゆく

岩崎俊

たいくつな氷柱が捉へゐる落暉

五十嵐敏子

父と子の襲名披露春の風

本田豊明

遠富士が冬の山河を鎮めけり

良知悦郎

西行忌葦焼きの火の放たるる

佐野久乃

ものすべて新しくなる雪の朝

山岸明子

あけすけの空よ盆地よ雪解急

田部富仁子

紙風船くるりくるりと母の留守

横尾かな

二日灸据糸をちこちの斑雪山

伊藤真代

もてなしは一輪挿しの水仙花

村手雅子

母小さし旧正の日の中に置く

荒井一代

鏡青く青く磨きて涅槃の日

森祐司

やはらかく墨磨つて春立つ日なり

和田遊

弥生三月机ひとつが吾の城

針谷忠郎

雪山も児には大きな滑り台

中川幸恵

テーブルに鳩の箸置淑気満つ

井上つぐみ

歳時記が書棚に二冊日脚伸ぶ

立石まどか

切抜きの染の型紙春立つ日

水谷はや子



底紅集

増成栗人 選

アイウエオ順
毎月順環致します。

立春大吉

五十嵐敏子

たいくつな氷柱が捉へゐる落暉
雪後の天しんそこ蒼くさざ波す
恋猫の声にも馬齢ありにけり
立春大吉十年梅酒の甘美さに
ころざしと言ふほどでなし着ぶくれて
笛吹きケトル高鳴りをして春立つ日

寒紅梅

河合公八郎

真盛りの椿は美しき名を持ってり
これほどに咲く浄智寺の臘梅は
老の身に力を貰ふ寒紅梅
山寺の清々しきは寒桜
里山の藪鶯のここかしこ
沈丁の花を挟んで立話

魚は氷に

倉林はるこ

木守柿一枚となる空の碧
初うぐひす鳴く仏壇を全開に
取り出してまた仕舞ひゐる春のもの
魚は氷に風音に耳敏くなる
春シヨール墓石の肩にあづけたる
会ひたくて会ひたくていま蘆の角

寒満月

坂入喜代枝

湧水で洗ふ手のひら山小春
沼べりを埋めつくすほど鴨の来て
筑波へ来る笑点一座冬の晴
寄席はねて寒満月が野の涯に
花鉢を日向へうつす目借どき
熱き茶を飲みほつと春の雨

冬の雷

中川源北

風信子の咲きたる家へ退院す
真夜の風雪をんななど来はせぬか
一病を持ち冬麗の山へ向く
十二月八日の記憶冬の雷
山眠る戦災のなき平成ぞ
軒に吊る干柿の粉吹き初むる

男の子生る

佐藤 哲

生まれしは男の子よ木の芽こそり立つ
立春大吉女系の家に男の子
団欒は曾孫の話春炬燵
雪国に雪なき二月過ぎゆけり
雪とうになし如月の一盆地
飾られて床の間が雛の間となりぬ

出羽路

広瀬 弘

生きてなほ月山筍の香を探し
立春の頃の川面や最上川
山里は山里らしき春一番
飲食に視ゆる衰へ三が日
立春の出羽路に人の影を見ず
幼らの残雪蹴りつ草を摘む

サンピラー

杉崎妙子

サンピラー現象の立つ枯野かな
夫あらば熱爛乞はる寒さかな
寒菊の小花となりし二三輪
冬天を断ち切る飛行機雲二條
父よりも母よりも生き豆を撒く
春一番橋の氷柱を落としけり

真野御陵

藤原 翔

雪ばんばふはと真昼の能舞台
恋どきの朱鷺と出会へり真野御陵
いちめんの豌豆畑に日のとどく
向う佐渡吾が丈を越す花薊
ふるさとの雪降る日なり畦をゆく
二日雪三日の晴れて越後獅子

山彦集

増成栗人 選



牛久 岩崎 俊

白鳥に喫水線のありにけり
路地裏を琴の音流る春隣
越して来し人も花好き追儼の日
揚がりたる風のふるへが手元まで
春の雪動かぬものを包みゆく
鳶の春蒼天はなほ上にあり

大阪 林 未生

河内野に名のみ春の風の音
塚多き里曲に春の遠きこと
梅三分近つ飛鳥の土師の里
天平の土師のけむりか野火立てり
雨あとの芽吹き森へ深く入る
鸞替の人波が揺れ空が揺れ

豊橋 荒井一代

母小さし旧正の日の中に置く
ぼうたんの芽に一寸のこころざし
寒紅梅山の日差しのゆるやかに
水切りによき石探し卒業期
春禽のこゑの明るき雑木山
春耕の田を渡りゆく葉売り

松戸 良知悦郎

煙まで燃え左義長の果てにけり
新しき鳥の足あと寒の入
遠富士が冬の山河を鎮めけり
臘梅の香が日に溶けて赤城晴
関東平野水辺の葦の枯れしまま
暁の鉄路の音も春隣

仙台 佐藤あさ子

旧正の年輪にある明るさよ
大甕に挿す一束の薄紅梅
野水仙手折れば母の声がする
畑を打つふたりに山の日が届く
鷹鳩と化す日の野辺をゆく農夫
問合よき鴨の番よかげるへり

喜多方 田部富仁子

ゆるやかに母のもの着て着ぶくれて
ちらほらと寒の灯点る散居村
うららかや在所言葉の親しさに
あけすけの空よ盆地よ雪解急
熱爛や父子の会話長々と
禅寺の雪解霰の賑々し

仙台 佐野久乃

西行忌葦焼きの火の放たるる
馬走り武者走ある城に春
海苔粗朶も小島も沖の日溜りに
緋梅白梅落雁の香が口中に
百千鳥来よ陸奥国一之宮
水音を追ひかけてゆく雪解風

松戸 森 祐司

母在せ春鴨の水尾届きくる
鏡青く青く磨きて涅槃の日
光分つごと煮凝に箸を入れ
水底のやうなあかとき鳥の恋
鷹鳩に露座仏に日矢降り止まぬ
己が色こぼさぬやうに春の月

岡崎 神野未友紀

春迎ふ日なり壬生菜に塩を振る
浅春の紅茶と堇の砂糖漬
魚氷に上り暁の鐘の音
白魚の尾鰭に力ありにけり
越天楽今様梅の日和なり
還暦の二人の暮らし花菜漬

羽音集

増成栗人 選



門灯のぼうと今宵は雪となる 松戸 山岸明子
雪催賢治の父の書を読み
夫の留守静かに曉けの雪が降る
ものすべて新しくなる雪の朝
日向ぼこ庭の雀がすぐそこに
魚は水に起業三十年の朝 豊川 村手雅子
もてなしは一輪挿しの水仙花
詣で来て梅の蕾のふくらみぬ
日脚伸ぶ椿大社の暈の目
出産の予定日近し土筆摘む
落葉踏む音がうしろを蹤いてくる 流山 中内敏夫
春の雲富岳に影を落したり
体力も気力もあれど霜柱
二月尽寒と暖とのくりかへし
駆け抜ける運河の土手のつくしんぼ
稽古場に啓蟄の風通しけり 松戸 吉清和代
卵置く音のかすかに春の雪
春泥や濃き牛乳は囁んで飲む
ばらの芽や珈琲に添ふ陶の匙
夕方は子らを見送る葱坊主

一月一日鶴の土鈴の飾り紐 豊川 水谷はや子

雀来てをり湯たんぼの冷める頃
水仙を壺に久女の忌でありぬ
久女忌の普段着に袖通しけり
切抜きの染の型紙春立つ日
ウイスキーボンボンふみ冬灯 横須賀 鈴木 崇
雑炊のふんはり炊けて夜の黙
春節の顔真卿に人の列

境内の公園雲雀笛ひとつ
先触れのやうなる春の霰降る
着水の風切羽よ春立てり 船橋 藤原明美
いちめんの麦の芽やはし遠筑波

図書館の窓は金色春立てり
のんびりと雲見て過ぐす雛の日
珈琲にマシユマロ浮かべはだれ雪
父と子の襲名披露春の風 稲城 本田豊明
摩天楼の街に一樹の寒桜

中天にスーパームーン懐手
戸を繰れば一輪のみの紅椿
港湾の波の荒ぶる二月かな

踏み場なき玩具だらけの冬座敷 会津 中川幸恵
弁当に昨夜の煮物寒に入る
雪山も兎には大きな滑り台
雪月夜手からこぼれし正露丸
足跡が道しるべなり雪光る
庖丁の軽やかな音春を呼ぶ 我孫子 相川 健
山際の光ケを集めて梅にほふ
春そこに誰がつくりし砂の城
なやらひの鬼には帰るところなし
御仏も所在なげなり出開帳
春おぼろ手作りのパン持ちて来る 土浦 大沼経子
いつせいに飛び立つふくら雀かな
晴十日花芽に水をていねいに
子らの来て古き土鍋で鱈ちりに
火加減の調節無用関東煮 さいたま 佐藤慧美子
肩寄せて暖簾をくぐる二月尽
感情の縫れを解くフリージア
言ひ訳を許してバレンタインの日
野に出でよ冬も終りの空の色

茶庵閑話

虫丸

